

第1部 エッセイ

テーマ「おむすび」

一般の部

木島平村長賞

ばあちゃんの意味むすび

山崎 幸正

自宅から少し離れた実家に行き、私の自室だった部屋を整理していると、小学校の教科書に交じってほこりだらけの児童書が出てきた。少女のドロシーが犬のトトと一緒に、カカシとブリキの木こりとライオンを従え、冒険の旅に出る『オズの魔法使い』の物語。小学校の低学年のころ、夢中で読んだ本だった。

懐かしさに惹かれながらページをめくっていくと、所々に薄茶色のシミがある。これは何だろうと記憶の螺旋を辿っていくと、そうだ、この本を初めて手にしたとき、ばあちゃんから大きな味噌

むすびをもらい、それを食べながら読んだ記憶がよみがえった。

その日、夕方まで出掛ける母の代わりに、私の家にやって来たばあちゃん。私と弟のために、味噌むすびを握って持って来たのだ。

「母ちゃんの作る海苔むすびよりうまい！」思わず、声を上げる私と弟。

「むすびは丸く包み込むように握るのがコツじや。それに表面にまぶした味噌。香ばしくって、実にごはんに合うんじゃない」

ばあちゃんが得意げに微笑む。

地域によつては表面の味噌を焼く方法もあるが、私の住む北信州では、味噌で手を汚しながら食べるのが普通だった。本来は農作業の合間の腹持ちのおやつで、安くて簡単にできる代物として重宝された時代があったと聞く。本のシミは指先に付いた味噌だったのだろう。

ばあちゃんは私が中学生のときに逝ったが、このシミが久し振りにばあちゃんを思い出させてくれた。あのときの誇らしげな顔が脳裏に浮かぶ。

そういえば最近、年老いた母が「ばあちゃんにそっくりになってきた」と、嘆いているのか喜ん

でいるのか、何とも言えない表情を浮かべるときがある。どちらの気持ちかは分からないが、ばあちゃんを思い出していることに違いはないだろう。ばあちゃんは今もみんなのそばにいる。そんな気がしてならない。